平成11年2月号（通巻15号）

にぎわい

－日本海にぎわい・交流海道推進協議会通信－

～会員だより～

石川県　金沢市と七尾市から

石川県は、日本列島のほぼ中央部に位置し、霊峰白山を頂く「加賀地区」と、日本海に突き出した「能登半島」からなり、気候、風土、地形なども変化に富み、観光資源にも恵まれた自然豊かな県です。

県内には重要港湾である金沢港、七尾港と、地方港湾10港の計12港があり、それぞれの地域特性に応じて、物流のみでなく、「まち、ひと、情報」の交流に役だっています。

今回は、歴史と伝統の町「金沢市」と、自然と観光の町「七尾市」から、金沢港と七尾港の話題をお届けします。

金沢港（金沢市企画調整課）

＝歴史と文化が息ずく港町（金沢港：大野町）＝

金沢港は昭和39年に重要港湾の指定を受け、大野川右岸の掘り込み港湾として建設された比較的新しい港ですが、そのルーツにある大野港、金石港の歴史は、北前船の時代、さらには遠く奈良時代の大陸との往来にまでもさかのぼります。

近代的な整備が進む港から、ほんの一歩足を踏み入れると、歴史と文化が息づく港町に出会うことができます。

（富商が築いた港町の文化）

江戸時代には加賀百万石の権威を背景に、北前船がこの地を本拠として活躍し、いわゆる御手船、廻米船の名で江戸、大阪に往来しており、「北の富を運んでくる船」として各地で歓迎され、帰港地の大野、金石は繁栄を極めました。

こうした中、広く海外とも交易し、一代で莫大な富を築いた豪商銭屋五兵衛など、多くの富商が生まれました。

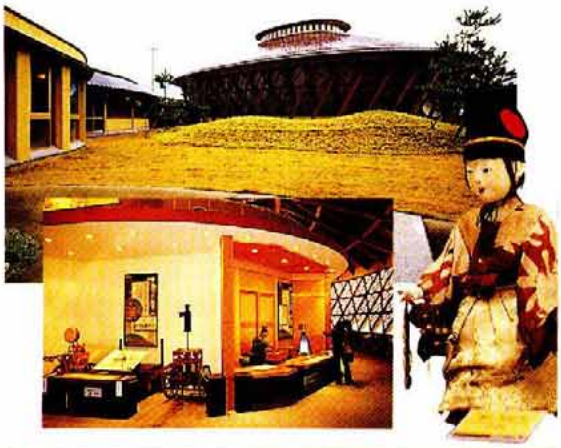
大野には、船主の大富商のほか、回船問屋、船問屋、醤油醸造業者などの富商が多く、彼らを中心に、茶を嗜んだり、俳句を詠む風流の文化の裾野が広がっていきました。彼らは数多くの茶道具や軸、書画、骨董を有して楽しみ、目利きにも優れていたようです。そうした地域性もあって、茶人や俳人、画家や道具商人達の出入りも多く、幕末の「からくり師」として名高い「大野弁吉」もそうした1人で、大野に移り住んでから生涯をここで暮らし、数々の発明品や、芸術品を残しています。

富商の家は、今も昔のままの佇まいで所々軒を連ねており、金沢市の「こまちなみ保存区域」に指定されています。

●幕末の大発明家、大野弁吉を知る

石川県金沢港大野からくり記念館

平成8年に完成した、大野にゆかりのある大野弁吉の遺品などを展示する記念館。大野弁吉は、加賀の平賀源内ともいわれたほど発明好きの人物だった。寛政13年（1801）京都で生まれ、20歳で長崎に行き、理化学、医学、天文学などあらゆる知識を取得している。その後、1883年に大野町の中村家へ婿養子に入る。大野でも、元来の探求心を発揮し、写真機や仕掛け人形などを作り住民を驚かせていた。いつしか「からくり弁吉」と呼ばれるようになった弁吉は、当時、豪商として名を馳せた銭屋五兵衛からも一目置かれ、精神面のオブザーバーとして五兵衛を支えていたという。館内には、そんな弁吉の発明品や愛用品、からくりの歴史などが紹介展示されている。なかでも巧妙な仕掛けで動く三番叟人形は見事だ。また、弁吉の交友関係や人脈、活躍ぶりなどを紹介するコーナーや、実際にからくりが動く様子なども見られる。



開館時間は9:00～17:00　入館料300円、毎週水曜日休館
金沢市大野町4丁目甲2－29
☎076－266－1311

（醤油のまち大野）

藩政期からおよそ350年以上も加賀百万石の味を支えてきた醤油のまち・大野。かつて、紀州から醸造技術を持ち帰った大野の商人・直江屋伊兵衛が、その造り方を広めたことが起源とされています。

大野醤油（直江家）

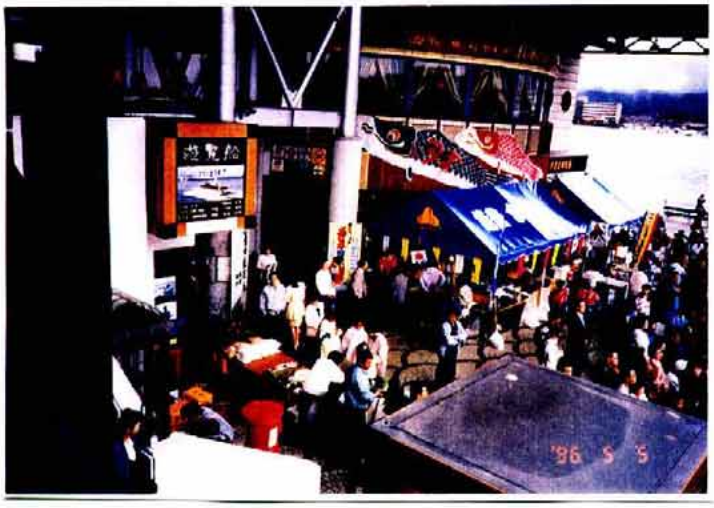
元禄期には城下町金沢は全国第4位の人口12万人都市となり、その人口に見合うだけの物品の需要と供給が必要となり、流通の要であった海運が栄えました。

大野は、城下町の主要港としても賑わい、全国各地の名産品、醤油の原料となる上質の大豆や屋昆布はもちろんのこと、当時、一級品であった関西醤油も手軽に取り寄せ、その味わいを研究することができました。このことが、今日の大野醤油の名声と産地としての礎になったと見られています。

金沢都心軸の一端として、近代的発展を遂げる金沢港後背地の一角にありながら、港町大野には、しっとりと落ち着いた佇まいの中に藩政時代に築かれた独自の文化が今も息づいています。

みそ醤油藏などを覗きながら、昔の佇まいを残すまちなみを散策してみませんか。金沢港がもつもう一つの魅力に出会えることと思います。

七尾港（七尾市産業部商工観光課）



波の音さえ聞こえない真っ暗な夜の七尾港府中波止場に、大きな背ビレをイメージした「七尾フィッシャーマンズワーフ・能登食祭市場」がライトアップされて浮かび上がる・・・・・・。

能登食祭市場は、民間主導で海と港を生かした街づくり運動や能登国際テント村などのイベント開催を経て行政が支援する形で建設されたもので、七尾港の名所として今日も多くの観光客や市民で賑わっています。

さて、七尾市は、養老2年（718）能登国立国により国府とされ、国津の香島津では、国内の産物の集散で賑わい、能登の政治、経済、文化の中心として栄えてきました。中世にはいると、能登の守護畠山氏の外港として軍事、産業面で重要視され、交易による町衆の経済的な下地の中で、都の文化を取り入れた170年に及ぶ治世は畠山文化を花咲かせたといわれ、本市が誇る桃山美術の巨匠・長谷川等伯も、そのような時代背景から生まれたといわれています。

畠山氏の居城があった七尾城の七つの屋根をイメージした石川県七尾美術館では、日常的に等伯の作品やその人となりを知っていただこうとハイビジョンで紹介しているのでぜひご覧いただきたいと思います。

江戸時代には、日本海側の他の港と同様に北前船で賑わい、文化10年（1813）には、外海船40艘、外海船並90艘が活躍していたと記録にあります。

幕末の七尾湾には、前田家の家紋「剣梅鉢」を船印とした「梅鉢海軍」の鉄製蒸気船や木製帆前船7隻が浮かび、文久2年（1862）には、造船、製鉄機能を持った軍艦所が建設されていて、軍艦所に設置された語学所では、短期間でしたが英国人教師オズボンの薫陶を受けた若者の中から、タカジアスターゼを発明した高峰譲吉博士や日本科学の建設者といわれる桜井錠二博士などが育っています。

明治のはじめには、七尾港には500～2，000石の帆船が100隻以上出入りしていましたが、次第に西洋系の汽船に押され姿を消していくこととなります。

その後、多くの人々の努力により、七尾港は明治30年開港外貿易港、そして、同32年には開港場に指定され、北は樺太・北海道から西は韓国の釜山や北西岸にいたるウラジオ航路の開設で賑わい、昭和45年の金沢港開港まで石川県唯一の国際貿易港としてその重責を担ったのです。

ところで、平成11年の今年は、七尾港開港100周年と市制施行60周年と重なった記

念すべき年であり、勅令公布日の7月12日の盛大な式典挙行のあと、7月19，20日の港祭りまでの期間中様々なイベントを開催する予定です。9月8日には客船「飛鳥」で佐渡沖までのワンナイトクルーズを実施し、環日本海における「港ななお」を強くアピールしていきたいと考えています。

七尾港は今、物流機能を集中させ、一大物流基地を構築するため大田地区に－13m大型岸壁を建設しています。また、液化ガスターミナル（株）や七尾大田火力発電所に加えて、平成15年操業開始を目処にLPG国家備蓄基地建設などエネルギー港湾としての整備が進んでいて、さらに能登食祭市場横では約2．5haの賑わい創出交流拠点基地となる親水空間整備が行われています。

大きく変貌する七尾港ですが、緑の能登島を眼前に爽やかな潮風を受けて遊ぶ子供達の姿は今も昔も変わっていません。

～お願い～

これから人事異動等の時期になってきますが、担当が変わられた場合等には、「平成10年度総会資料の会員名簿の該当するページ」を見え消しで結構ですので、一建事務局までFAXいただけるようお願いします。

（第一港湾建設局　企画課　松本）

編　集　後　記

日に日に日が長くなって、天候も少しづつですが春を感じれるようになってきました。これからが私たちの日本海側地域は最も自然の生命力が感じれる季節になってくるのでしょう。今回は、年度末の業務の忙しい中、金沢市と七尾市の会員の方から原稿を寄せて頂きました。業務の合間のひとときに読んで頂き、石川県の「みなとまち」に思いを馳せていただければ幸いです。

次回一建担当は6月頃になりますが、それまでの間、各地の春の話題が聞かれるかもしれません。次号の担当、北海局さんよろしくお願いします。

（第一港湾建設局　企画課　）

編　集

日本海にぎわい・交流海道推進協議会事務局
第一港湾建設局　企画課内　TEL　025－265－7781
FAX　025－230－3680